



TITLE:

探索活動の側面より見た物及び空間の認知発達(III 共同利用研究2.研究成果)

AUTHOR(S):

佐伯, 康子; 塩坪, いく子

CITATION:

佐伯, 康子 ...[et al]. 探索活動の側面より見た物及び空間の認知発達(III 共同利用研究2.研究成果). 霊長類研究所年報 1983, 12: 44-44

ISSUE DATE:

1983-01-19

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/163037>

RIGHT:

ニホンザルオス・メス間の親密性と性行動の 実験的研究

正 高 信 男 (阪大・人間科学)

ニホンザルの非交尾期における親和的な関係が交尾期における性行動の生起にどのような影響を与えるのかを調べる目的で、実験を行なった。

グルーミング行動だけは行なうことができるものの、それ以上の身体接触は許容されないような事態を人為的に設定し、被験体よりオス・メス1頭を選択して、まず非交尾期にペアリングを行なったのちに、通常の出会わせ実験を交尾期に行なった。

初めて出会った個体間にグルーミングが生ずるにいたるまでの経過時間を、グルーミングの生じやすさの測度と考え、その値と性行動の生じやすさとの関係を検討したところ、次のような規則性が見られた。

- (1) 以前に出会った経験が、まったくなかったオス・メスの間では、非交尾期におけるグルーミングの生じやすさと性行動が行なわれる可能性の間には、正の相関が見られた。
- (2) 出自集団が同一であり、出会いの経験が豊富である被験体のなかには、グルーミング頻度が交尾・非交尾期を通じ、極端に高いペアが見られ、彼らには性行動がまったく観察されなかった。また攻撃行動が生じない点でも特異的であった。それ以外のペアのグルーミングの生起パターンは、(1)の被験体グループに見られたものとのあいだに変わりがなく、性行動が生ずる可能性との間には、やはり正の相関が見られた。

探索活動の側面より見た物及び空間の認知発達

佐 伯 康 子 (京大・文)
塩 坪 い く 子 (京大・文)

霊長類の対象の永続性と空間認知の発達を調べ、ヒトの乳児と比較した。その際、測度としては、ヒトとの行動差の著しい移動反応を用いた。

被験体は、人工的に飼育された56年生まれのニホンザルの幼体6匹(うちヤクザル2匹)であるが、データがとれたのは主として4匹だった。これらは一定の色及び材質のタオルを与えられて飼

育され、このタオルの後追いをすることが実験に先立って確認された。

対象の永続性実験では子ザルの目の前でタオルを隠し、それを探させた。1つの衝立の陰にタオルが隠れる課題では、各々28, 38, 38, 45日令で通過するのがみられた。衝立2つの一方にタオルが隠れる場合は、通過したのは各々35, 41, 41, 55~80の間の日令である。

空間認知課題では、 $1.4 \times 1.4 \times 0.7$ mの正方形の囲いの中に子ザルを入れ、タオルを子ザルに見せながら、向き合う二つの出口の一方より隠す。その後子ザルを 180° 回転させてから隠したタオルを探しに行かせる。ヒトの乳児では、この種の課題の場合、6カ月頃は自己の身体を基準とした探索という自己中心的定位が専らみられ、16カ月頃に、外界の視覚的手掛をもちいなくとも、客観的定位が可能となる。その間11カ月頃に過渡的段階として視覚的手掛がかりがあれば客観的定位ができ、なければ自己中心的定位を行うという時期がある。子ザルの結果では、衝立2つが可能となる時期を目安にこの定位課題を導入したのであるが、導入とほぼ同時に視覚的手掛がかりの有無にかかわらず正しく定位し、自己中心的定位をする時期は確認されなかった。これは、単に導入の時期が遅かった故とも解釈できるが、ヒトの乳児では、衝立2つを通過するのが9カ月頃で、この時定位は視覚的手掛に頼っている。したがって子ザルはヒトの乳児とはかなり異ったやり方で空間的定位を行っている可能性が示唆される。

ニホンザル未成熟個体におけるコミュニケーションの発達過程に関する行動学的研究

木 村 光 伸 (名古屋学院大・経)

前年にひき続き、生後6カ月未満の行動発達について観察を行なった。この段階におけるニホンザルの社会的発達は大きく3つの時期に区分された。第1の時期は生後1カ月を目途とし、運動能力の発達に伴う母子接触減少の時期であり、探索的行動とそれに続く「ひとり遊び」の萌芽期としてとらえられる。第2段階は1カ月目から3カ月目の末にかけて区分され、そこではあかんばん同士の近接および2者的な遊び仲間関係の形成が認められるようになる。2者間の近接関係は各個